

# 自然と至然

## ——自然と共生するアプローチ

佐藤 建吉 SATO Kenkichi

一般社団法人 光楓座 代表理事

私たちの暮らしの基(もと)である「自然(しぜん)」。その成り立ちは、「自ら然る(おのずからしかる)」の「自然(じねん)」に由来する。しかし、科学技術が発達し大きな力を持ち、その影響が増し私たちの社会を席巻するかのようになり、前回述べた「技術連関」や「エコエティカ」という倫理(学)が重要になった。今回は、自然と人間の関わりの面から、二つの自然、すなわち「天然の自然」と「人工の自然」について述べ、新たに「至然(しぜん)」について、環境倫理の面から解説する。

### はじめに

筆者は、千葉県いすみ市岬町に住んでいる。外房海岸と呼んでいる太平洋まで、直線600mのところ到我家があり、波の高いときには、防波ブロックに打ち当たる波音(波濤の音)が激しい。海辺は、生命誕生の場所ともいわれているが、そこは自然の外観を呈している。その主体は、波であり、海水であり、砂であり、岩であり、そしてそれらが海辺をつくっている。似たものに道辺もあるが、海辺は、道辺よりははまだ自然の体をなしている。

レイチェル・カーソンの著作『海辺』(1955年刊)にあるように、甥のロジャーが観た海辺は、その時代の自然であり、レイチェルが幼いときに観た海辺の自然とは異なるかもしれない。外房海岸も、昔に比べ海岸の砂浜が減退してしまったと、地元の人々は語る。時間の経過が、海辺の自然をも変えたのである。

道辺は、その変容が激しいかもしれない。それは、土と石の時代からコンクリートとなり、アスファルトとなり、その上を通る主体も、草鞋から靴になり、馬や馬車になり、自動車となった。それにつれ沿道の外観も変容し、自然から隔絶したものもある。同様に、コンクリートで縁取られた海辺もある。このように、自然にも、時代の変化の影響を大きく受けるものと小さいものがある。

後述するように、「自然」は、元のまんま、それが発

したときのまんま、を意味する。松尾芭蕉は、自然を「じねん」といった。それは、「自ら然る(おのずからしかる)」に由来する。

本稿では、「自然」の意味と自然観について述べ、また、「自然(しぜん)」における二つの概念、「天然の自然」と「人工の自然」を対比して述べる。そして、自然への回帰を意図し、新しく「至然(しぜん)」という言葉を提案し、環境についての筆者の考えを、環境倫理に関係づけて述べたい。

### 1. 自然とは

#### 1.1 自然(じねん)について

漢字としての「自然」。読みは「しぜん」が一般的であるが、「じねん」とも読まれる。筆者の「じねん」との出会いは、松尾芭蕉の生誕地、三重県伊賀市を訪ねたときである。いまから10年以上も前のことである。

芭蕉記念館には次の石名盤がある。

『自然(じねん)注に曰(いは)く、天に従ふを道と謂ひ、道に従ふを自然と謂ふ』

これは芭蕉の俳諧理念を説いたもので、老子の「人法地、地法天、天法道、道法自然」(人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る)を根拠としている。

図1/「自然」(じねん)の石名盤

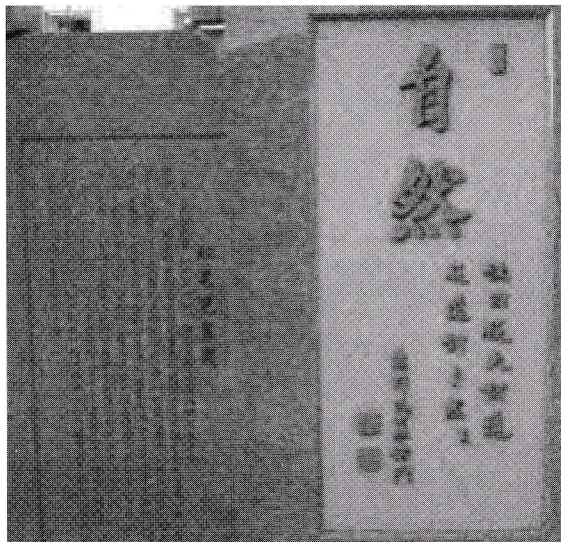


図2/「人と自然の調和、そしてバベルの塔」(2014年)のページ



自然 — 自ら然る (おのずからしかる)

芭蕉にとって「自然」とは、存在する万物個々が、天および道に従うことであり、個々それぞれのあり方そのものが「自然」であった。

1.2 自然(しぜん)について

最近、別荘の段ボールの中から昔の紙ファイルが出てきた。懐かしいリサイクル活動の機関誌『KAMOME』で、「人と自然の調和、そしてバベルの塔」というテーマで書いた筆者の投稿記事であった。

内容としては、外房の岬町に、千葉市から引越してきて7年が過ぎたころの背景が、冒頭に書かれている。いまから、20年も前のことである。

それは、イギリスのロンドン郊外のウインザー近くに滞在していたときに、自然と密接に暮らすイギリス人に刺激されてのことだった。また、イギリスでの粉ひき風車との出会いが、筆者を風力発電と環境問題への研究に向かわせたと書いている。風力発電の係わりでは、千葉県銚子市での風力発電の初動的な取り組みが千葉県いすみ市や勝浦市など房総の南部地域にも波及するように、その6市町において巡回方式の講演活動を行ったことについても触れている。

その投稿記事の内容には、「自然を護るということは何だろう?」「環境とは?」との問いかけもある。まず、「自然」を『広辞苑』で引き、「おのずからそうになっているさま、天然のままで人為の加わらないさま、あるがままのさま」と書き、さらに「天然」を引き、「人為の加わらない自然のままの状態」としている。また、「人工」に対比させている。こうして、辞書の上では、「自然」と「天然」とは、差はくみ取れないとしている。

次に、「自然」を分解して考え、「自」は「始まり」を意味し、「然」は「……らしい」を意味するとしている。また、「天」は、その基本は「大」であり、これは、両

手を広げている「人」を象徴しており、上空にいる人を超えた存在が、神のいる「天」であることとらえている。つまり、「自然」や「天然」はそうした神々しい創始の成り立ち、造られたままという意味であると理解した。

以上の説明は、いま読み直しても合意できることであり、ここに引用した。

1.3 自然についての補遺

既述した松尾芭蕉の「じねん」もこれと同じで、始まりを意味している。したがって、自然を「しぜん」という読むことは、芭蕉のあとのことであるという。少し文献から引用すれば、空海の『十住心論』に最も早く「自然」という用語が使われたという。これは、名詞としての「自然」で、「じねん」である。

その後、「おのずからしかる」の意味では「自ら然る」という動詞的用法は親鸞の「自然法爾」であるという。その名詞的用法は、「凡そ天地人物の間、自然の条理あり」として宇宙論へ移って、「しぜん」になったのであるという。この場合でも、自律的運動変化を強調しているという。

そして、「自然」は、その中にある存在の「人間」も対象にされ、精神や心情的な思いにも「自然」が意味づけられるようになったという。つまり、「自然な気持ち」、「自然の情感」などにも「自然」が用いられるということである。

そして、これら「自然」という外観的、心情的な「自然(しぜん)」は、四季の変化、また時には地震や台風などの災害も起こるが、人間の側からは対策ができないので、これら外部影響には、受動的になるという感覚や感情が日本人の姿になり、前述のように「神々しい」ということに、「自然」という言葉の当てはめが合致したといえるだろう。

## 2. 「天然の自然」と「人工の自然」

### 2.1 二つの自然

いわゆる自然豊かな田舎から人工によって造られた都市への移動は、ある面で仕方ないことである。都市の暮らしでは資源やエネルギーが必要である。また、背景として科学技術が必要であった。いまや、私たち日本(や世界)での社会は、科学技術が大きな影響や効果を為し、前回述べたように、「技術連関」という言葉がつくられ環境が生まれた。結果、暮らしが変化し、科学技術が空気のようになり、前回のテーマとして掲げた「エコエティカ」を必要とする背景がここにある。それは、人間が、快適さを求めて続けてきた結果で、同時に、幸福や健康を求めての発達でもあった。

アリストテレスの世界観として、「四元素」の考えがある。図3のように、火・土・水・空気が四元素であり、関連として乾・冷・湿・熱をあげている。私たちの今日の暮らしにおいても明確に存在し、生活の確かな基(もと)である。すなわち、自然の基盤をここに見出すことも

図3/ アルキメデスの四元素による自然 — 「天然の自然」

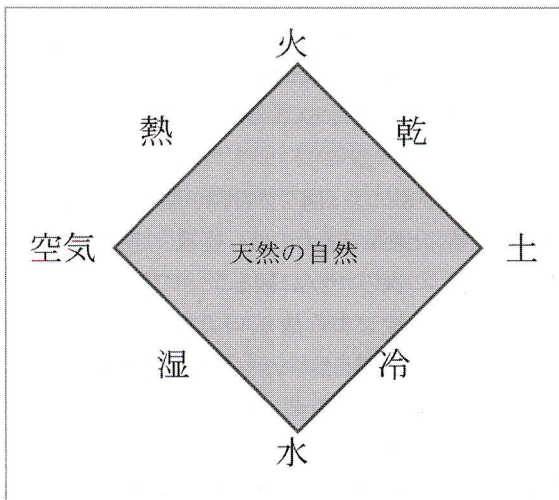
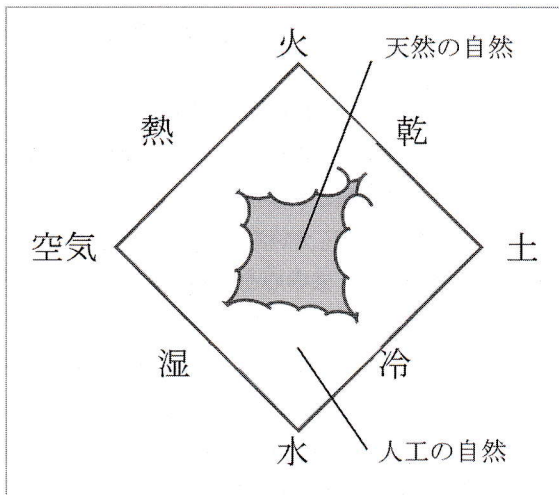


図4/ 人工の自然で浸食された「天然の自然」



できる。本稿では、このように自然(じねん)に由来する自然を、「天然の自然」と呼ぶことにする。

一方、科学技術がつくり出した新しい環境である「技術連関」は、これら四つの火・土・水・空気に関わった中で、快適で便利な素材や資源、あるいは環境制御の技術や商品をつくり出した。結果、「天然の自然」は浸食され、その範囲や領域が置き換えられ、暮らしは変容した。こうした新たな環境は、「人工の自然」と呼んでもよさそうである。その概念を、図4に示す。

こうして、今日では、「自ら然る」という「天然の自然」のほかに、人間の手と頭によってつくられた「人工の自然」がある。「人工の自然」を語るには、地球上の生物(人間以外の他の生物)とは異なる人間の存在と機能や行為について認識し、肯定しなければならない。人間が地球で行ってきたこれまでの結果と、さらにこれからの可能性について否定することはできず、肯定し改善しなければならない。

### 2.2 自然環境への影響

私たちの暮らしは、人口密度を高く収容できる「都市」で行われるようになった。人口集中により都市は、新化し変容している。それは、環境にも変化をつくり出し、暮らしや生活様式自体が変化した。その様子は、人口密度による地図の表現である「カルトグラム」(図5)でみると明確でありアンバランスとも思える。それは、被害的にいえば「自然」への攻撃でもあり、結果的にいえば破壊も生じている。本来は、都市には「自然との共生」が求められるであろう。

先述の『KAMOME』には、筆者は環境問題に触れて岬町の自然や環境についても述べている。筆者は、散歩して見つけた川から投げ捨てられた波タン板の写真を掲げ、「大人の仕業」と書いている。それは、イギリスやオランダでの運河と親しんでいる暮らしや、デンマークでの16種類に分別リサイクルをしている実情を知って感じた故のことであった。田舎暮らしでも、環境

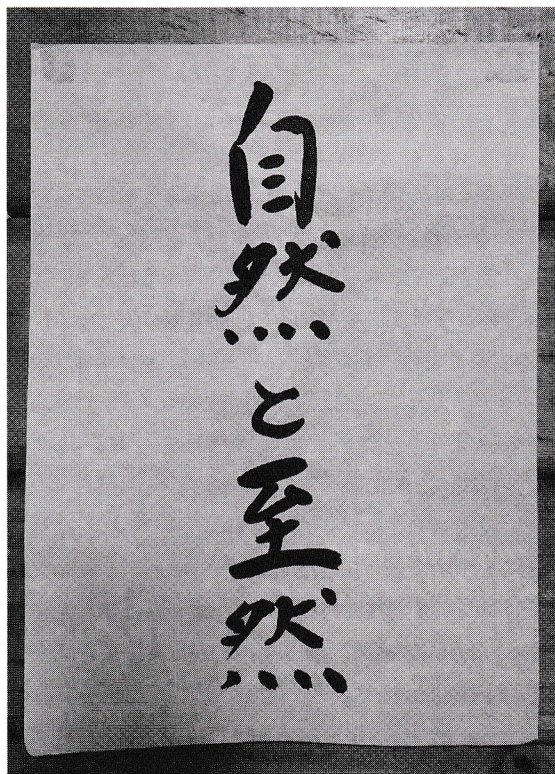
図5/ カルトグラムによる日本地図(著者作成)



図6/環境汚染は大人の仕業との記述とデンマークでの分別リサイクル



図7/「自然」と「至然」の自書



やりサイクルへの意識が低いと環境汚染や悪化が起きてしまう。その当時は、ISO 14001 が次第に導入され始めた頃であった。したがって、環境に関する動きが活発に展開されるようになった。現在は、改善されている。

### 3. 「自然」から「至然」に

#### 3.1 「至然」の導入

人類は、地球という環境に生き、暮らしている。自然の中の存在である。しかし科学技術が席捲する現代では、人類は自然を支配し制御する生命種ともなった。その歴史では、騎士団期、産業革命期、ポスト産業革命期、石油の時代、電気の時代、原子力の時代、核兵器の脅威の時代と特徴化してきた。この人類史がいま求めているのはポスト原子力の時代であり、自然エネルギー（再生可能エネルギー）の時代である。それは、顕在化した地球温暖化や気候変動化（異常気象）への気づきが後押しする。その方向性が、「自然回帰」である。

その時代へ向かうためには、新しい言葉が欲しい。筆者が考えたのは、「至然」である。これも、「しぜん」と読む。この発想は、かつての時刻表からで、列車の発車駅を「自東京」などと、到着駅を「至米原」などと記した。いまでは、「自至」は「発着」に置き換えられたが、いまでも、履歴書での学歴や職歴の始まりと終わりの年月には、「自至」が用いられているもある。

すなわち、自はfrom であり、至はto を意味する。

筆者は、自然が「自らし」との関わりから、「生まれたままに発している」であり、至然は、「生まれたままに帰る」、「生まれたままに至る」という意味づけから編み出した。悪化や破壊が進行した環境を、これらが生じていない「生まれたままの状態」に戻すことを、「至然」と呼ぶ。

岬町の我が家には、図7の自書が貼られている。筆者が「至然」と使い出したのは、連載している「新エネルギー新聞」の次のコラムに観ることができる。

「地域の地域による地域のためのSomething NEWS」第25回「自然」vs「至然」——いま、新しい時代のために必要な言葉

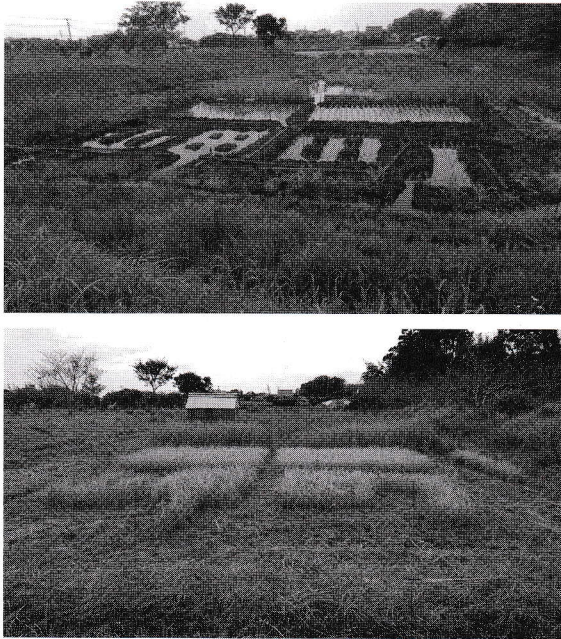
#### 3.2 コロナ禍における至然アプローチ

現在、世界に広がっている新型コロナウイルス・パンデミックは、人間の集団社会生活への挑戦とも警告ともとれる。

都市とは「人が集まる場所」という意味でもある。都市には、「市」の文字の市場（マーケット）があり、商品やサービス、そして情報が行きかう。経済性や価値・効率性という観念が支配している。田舎はどうだろう。屋敷や邸宅と結びつき、家中心や土地中心の暮らしの意味合いが強い。その家や財産を守るにふさわしい仕事や家業があった。「舎」は、「人（ひとやね）」、つまり家・屋敷の意味であり、それが「吉」とも感じられた。

都市と田舎の暮らしのそれぞれを否定することはできない。どちらにも人間が住み生きている。前提とされる

図8／筆者の「岬」「町」のアートを入れた農業体験



のは、安全安心、健康、そして暮らしである。安全安心の確保、健康の維持、充足できる衣食住、職業と学習、余暇などが、必須要件で課題となる。現代では、田舎ではなく都市のほうに魅力があり、磁場が強い。

が、コロナウイルスの感染は、地方に比べ首都圏や大都市に感染者が多い。感染者との接触確率が人口比率との相関性が強いことによる。他の大規模災害においても、大都市での現場にいる確率は人口密度との関係で、ハザードに対するリスクの確率が高くなる。

筆者は、東京に事務所があるが、外房の岬町に自宅があり、コロナ禍のいま、当地で農業体験している。生業ではないので、アートやデザイン取り入れ、田舎暮らしやその体験を楽しんでいる(図8)。

写真のように、稲づくりでは、「岬」「町」の文字の形にコシヒカリを植えている。田植えは手植え、稲刈りも手刈りで行った。脱穀と籾摺りは千葉県農業普及センターに出かけて機械を借りて行い、精米はコイン精米機でできる。

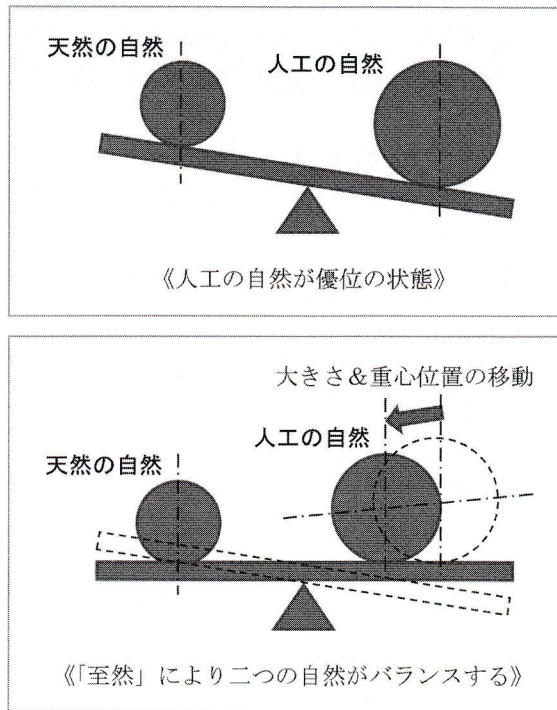
畑では、オリーブと菊芋を植えている。オリーブの収穫には3、4年は要するが、菊芋は5月に植えれば、秋には黄色い花が咲き、年末には芋を収穫できる。春まで土の中で未収穫で置くこともでき、手間のかからない農業体験ができる。

以上の実践は、都会の暮らしから田舎の暮らしに替えた生き方の例であり、「至然」のアプローチではないだろうか。一つの「自然との共生」と呼びたい。

### まとめ

以上、今回は、「自然」に対して「至然」という言葉の意味や背景、および必要性を述べた。図9には、

図9／至然の模式図



至然の概念を、「天然の自然」と「人工の自然」のバランスとして表現した。

これまでの、科学技術が先端技術を先導し、社会が追従してきた。便利さや快適性の欲求が優先され、是とされた。結果、地球温暖化やそれに伴う異常気象などが顕在化している。自然エネルギーや再生可能エネルギーの必要性が唱えられてきたが、これまで経済優先から先送りにされてきた面がある。

いま、重視されるべきは、持続可能な地球をつくり出すために、社会に貢献する技術であり、そのために先端技術が活かされるべきである。筆者は、専門の呼び方を「ソシオ・エンジニアリング」と掲げていたが、その拡がりや欲しい。それは、「至然」と合致する概念でもあるだろう。

### 【参考文献】

- 1) 佐藤建吉、環境と状況の違い、そして「できる状況づくり」、月刊環境管理、2021年1月号、vol.57、No.1、pp.66-69
- 2) 佐藤建吉、現代社会の環境倫理学「エコエティカ」、月刊環境管理、2021年2月号、vol.57、No.2、pp.66-70
- 3) レイチェル・カーソン(著)、上遠恵子(訳)、海辺(生命のふるさと)、平凡社、2000年
- 4) 佐藤建吉、人と自然の調和、そしてバベルの塔、機関誌KAMOME  
<https://www.facebook.com/kenkichi.sato.9/posts/3668993149854151>
- 5) 佐藤建吉、「自然」vs「至然」—いま、新しい時代のために必要な言葉、新エネルギー新聞、連載コラム「地域の地域による地域のためのSomething NEWS」、第25回、第31号7面(2015年7月27日(月)発行)  
[http://www.kofuza.jp/images/nen\\_2018\\_25.pdf](http://www.kofuza.jp/images/nen_2018_25.pdf)
- 6) 高木仁三郎、いま自然をどうみるか、白水社、2011年